

一心寺かわら版

第二十三号 平成二十三年九月発行

「東日本大震災に思う」

東日本大震災が起こった三月十一日、当山では総代世話人会が開かれている最中でした。もし、この地で震災が起こっていたらどういふ事態になっていたのか、みなさんとともに瓦礫の下に埋まっていたかもしれないことを想像すると、今この身があることの不思議を感じます。

先日、「東日本大震災百五十五日の記録」という番組を見ました。この未曾有の大地震をただ客観的にではなく、そこに生きる人間の目から見える真実を目の当たりにし、時間と共に薄れていた悲しみに再び沈まざるを得ませんでした。



阪神大震災で被災した経験を持つ中島岳志氏（北海道大学准教授）は

「今回の東日本大震災でも、位牌をリュックに入れて歩く被災者の姿をテレビで見た。死者が生者を支えている。生きることを後押ししている。死者の力とは何なのか。：（中略）：まだ、被災地の多くの人は絶望の中にいるはずだ。生きることに向きになりながらも、ふとした瞬間、途方もない虚無に襲われるだろう。生きていて意味があるのだろうか。そんなことを想起するかもしれ

れない。

確かに、亡くなった大切な人は、ここにいない。姿かたちは存在しない。しかし、その人は、生者から死者となつて存在している。あなたの心の中に。脳裏に。

死者の存在は透き通っている。だから、自己の心の中を直視してくる。見通してくる。生きているときは不可能だった透明な関係が、死者との間に突如生み出される。わだかまりなんて存在しない。二人の間の障壁は崩れ、心と心でつながることができ。これまでなかなか言えなかったことも言える。「ごめんね」も「ありがとう」も。：（中略）：死者と一緒に、僕たちは生きているのだ。」

と述べています。

一人の人間として、もちろん僧侶として、亡くなった方（仏）とのつながりを大切にしなければならぬ、生きる力にしていかなければならないと感じました。

宮澤正順氏（埼玉工業大客員教授）は

「東日本大震災から四カ月が過ぎた。被災地の復興の一日も早くらんことを全国民が願っている。中国の政治家・范中淹（九八九一〇五二）は自分が尊敬できる人物を

其れ必ず天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに後れて
樂しむと曰わんか。

と述べている。東京・小石川後樂園の後樂の名は、この文に由来する。しかし、後樂の上に先憂の二字が付くことを知る人は少なくなっている。

わが国でも商人として名をなした人の家訓に、「先義後利榮」と書かれているのを見たことがある。これは政治家のモットーである「先憂後樂」を経済の立場から言い換えたものである。大震災

の復興に当たる政治家は言うまでもなく、多くの人が、これらのことを胸に抱いて真剣に努力すべき時ではなからうか」と述べています。

被災された方々の秩序ある行動が国内外で称賛されていることを誇りに思うと同時に、「先憂後楽」など微塵もできていない自分に気付かされます。当山からも皆さんを代表して心ばかりの義捐金を送らせていただいた次第です。

この「先憂後楽」を体現したのが、仏・菩薩です。阿弥陀仏は「わたしが仏になるとき、浄土に生まれると信じて、わたしの名を称えるあなたを浄土へ生まれさせることができないうようなら、わたしは決してさとりはひらきません」と誓われています。その思いを受けて広めていくのが菩薩です。

僧侶であり、医者でもある対本宗訓氏は「無力なのは祈ることを忘れた心」と題した一文を書かれています。

「皆様もご存じのように、ジョン・レノンが平和への願いと祈りを託した「イマジン」は今なお世界中で歌い継がれています。私のメッセージもその一節に倣ったものです。

祈りは無力だと思えるかもしれませんが、しかし祈りが無力なのではありません。祈ることを忘れた心が無力なのです。

祈るだけでは何も解決しないと思えるかもしれませんが、そうではなくて祈りを欠いた行動が何の解決ももたらさないのです。



祈りは人間の篤く真摯な営みです。祈りは深き願いであり、無雑の直感から立ち現われてくる明確なビジョンです。思念のエネルギーであり、すべての言葉と行動を生み出す源泉です。祈りによってこそ言葉や行動に不屈の力と靈性の輝きがそなわることを、先人たちにおいて私たちはすでに実証済みではないでしょうか。

不調和の連鎖を繰り返さないためには、研ぎ澄まされた祈りの輪を世界に広げ、私たちの内なる声にしたがって力強く行動することが大切です。

国や体制を超え、民族や宗教を超え、痛みや困難に対して世界が一つになれるのは祈りです」

私たちは今こそ「祈り」、煩惱にまみれた祈りではなく仏・菩薩の祈りに手を合わせなければならぬと思います。

さて、震災後に、人々を支えている歌があると聞きます。応援歌もたくさん作られていると聞きます。

たとえば、水前寺清子さんの「三百六十五歩のマーチ」という曲があります。

「しあわせの隣にいても わからない日も あるんだね 一年三百六十五日 一歩違いで にがしても 人生は ワン・ツリー・パンチ 歩みを止めずに 夢みよう 千里の道も一歩から



はじまることを 信じよう 腕を振って 足をあげて ワン・ツ
ー ワン・ツー 休まないで 歩け」。

平原綾香さんが歌う「Jupiter(ジュピター)」
も人気だそうです。

「私を呼んだなら どこへでも行くわ あな
たのその涙 私のものに 今は自分を 抱き
しめて 命のぬくもり 感じて 私たちは誰
も ひとりじゃない ありのままですつと
愛されてる 望むように生きて 輝く未来を
いつまでも歌うわ あなたのために」。

また、「アンパンマンのマーチ」も勇気を与
えているそうです。



「なにが君の しあわせ なに
をして よろこぶ わからない
まま おわる そんなのはいやだ
忘れないで夢を こぼさないで涙
だから君は とぶんだ どこまで
も そうだ おそれないで みんな
なのために 愛と勇気だけが と
もだちさ ああ アンパンマン
やさしい君は いけ みんなの夢
まもるため」。

四国新聞掲載の小説『親鸞』でも、親鸞聖人の歌った今様が感
動を呼んだことが描かれています、それが今に伝わる和讃につ
ながっていきます。私たちがお勤めしている正信偈・念仏・和讃
も歌なのです。当時、念仏を喜ばれた人々はその歌に込められた
仏の心によって感動し、力をもらったのです。今、親鸞聖人の著

された和讃が、そのような歌となることを願うばかりです。

合掌

生死の苦海ほとりなし ひさしくしづめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける

『高僧和讃』真宗興正派同朋聖典・六三頁

本山興正寺参拝の前に―弥陀堂と御影堂―

本年は、親鸞聖人七百五十回大遠忌の年、当山では五月十五日
に勤まり、十月二十七日には本山興正寺へ団体参拝いたします。

寺には本堂があり、そこにはご本尊が安置してあります。浄土
真宗の寺院では阿弥陀如来をご本尊とする本堂があります。興
正寺には本堂である阿弥陀堂と別に、親鸞聖人のお木像(御真影)
を安置する御影堂があります。現在の地、七条堀川に移ってから、
日光の本廟、知恩院の山門とともに日本三建築の一つと称せられ
た一つ御堂(本堂と御影堂兼用の御堂)がありました。明治三十
五年に火災で焼失、その後、現在の両堂が建立されました。

阿弥陀如来一仏に帰依するという教義を持つ浄土真宗にとって、
御影堂はどのような存在なのでしょう。釈尊は、入滅の前に弟
子たちに、自らをよりどころとし、教えをよりどころにするよう
にと言葉を残し、釈尊個人への帰依を否定しました。にもかかわ
らず、釈尊のお墓(ストウーパ)が各地に作られ、釈尊への思い
は強く残りました。

親鸞聖人も、阿弥陀一仏への帰依を説かれましたが、聖人へ
の思いは強く残り、御影堂という形で伝わってきました。その思
いと、私たち凡夫が救われる道を示して下さった親鸞聖人への
報恩と讃仰の念です。教えを伝えて下さった祖師を大切に思う気

持ちは、親鸞聖人自身の中には無かったものなのででしょうか。親鸞聖人にとつての祖師への思いはどうだったのでしょうか。

親鸞聖人は祖師である法然上人に対して、『正信偈』に「本師源空は、仏教にあきらかにして、善悪の凡夫人を憐愍せしむ。真宗の教証、片州に興す。選択本願、悪世に弘む」と言われ、經典に説かれた阿弥陀如来の真実の教えを自らに伝えて下さった方として尊崇されていました。

『教行信証』には、法然上人の『選択念仏本願集』の書写をゆるされ、題字を自筆で書き入れてもらったことが記され、真影を書写することもゆるされたとあります。親鸞聖人は法然上人の御真影を大切に所持されていたわけです。

教えの論理からすれば、浄土往生は阿弥陀如来の本願のはたらきであつて、法然上人個人の行為に係るものではありません。しかし、親鸞聖人の祖師への思いが、そのようなかたちで示されたと思われまます。

また、『歎異抄』には「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」という言葉や、「たとひ法然上人にすかさねまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ」といった、法然上人に対する心からの帰依が見られます。親鸞聖人にも、祖師を大事に思う面が見られるわけです。

そのように、教えを伝えてくださった祖師を尊崇することには、「化身」という考え方が大きな影響をもっています。親鸞聖人は法然上人を阿弥陀如来や勢至菩薩の化身と仰ぎ敬っておられました。

単に歴史上の一人の人格としてではなく、その人格の背後に、仏や菩薩のはたらきを感じるのが化身ということですから、それは単純な生まれ変わりということではなく、私が見たりきを感じるわけですから、客観的に証明できるものでもなく、個人的な思いが重要な意味をもちます。日本では仏教の開祖である釈尊も尊崇していましたが、宗派を開いた開祖も尊崇し、祖師堂や大師堂や御影堂といった、祖師像を安置する堂宇が重視されました。この日本仏教独特の祖師信仰も御影堂の建立に影響があると考えられます。

私たち凡夫の救われる本願他力の教えを伝えてくださった、祖師に対する報恩や讃仰の思いというのが、御影堂を支えてきました。その思いは、親鸞聖人自身の祖師観にも見られ、浄土真宗の伝統のなかで大切な役割を果たしてきたのです。

この度の大遠忌参拜で、ともにご本山の阿弥陀堂と御影堂にお参りさせていただきましよう。

(漫画家・井上雄彦氏「親鸞聖人屏風絵」)

